## - 四日市空襲を語り継ぐ -再びふるさとを戦火にさらさぬために

加藤清助さんの挨拶は堂々としていていい。ギター演奏ですっかり落ち着いた会場で春日さんのお話が始まる。とてもまじめな一徹な方だ。「80歳の人間は現代史の目撃者」と自負されるが、正に春日さんの空襲体験は静かなのに生々しい。火は周辺から焼かれた。空襲は「空から降りてきた一方的な戦争」。高度を降ろしてきたB29のジュラルミンが赤く不気味に光る。火の海を少年は必死に逃げた。しかし、町内の役員をしていた父は死んだ。焼き殺された父の最期の光景。「夫はくそ真面目だったのがいかんかった」と生き残った妻(母親)は戦後何度も口惜しがったという。真面目な人が犠牲になる戦争。

だからこそ、春日さんはどのように軍国少年にされたかを自らの体験を込めて鋭く分析し、今の状況に十分通じると警告する。(仮想敵国をつくる。神の治める国と信じさす。日本を守る正しい戦争・聖戦がある。ウソの報道。お国のために早く戦場に行きたい。) それじゃ今、私たちはどうしたらいいのか。

続く河村先生のお話はまるでその場にいるように臨場感あふれる語りで進む。 昨日は69年前三滝川に逃げた跡を歩いてみえたという。火炎、うめき声、首ま で漬かって10時間、6月の川は冷たかった。川にも突き刺さる油脂焼夷弾、阿 鼻叫喚、生きた心地はしなかった。一家全滅の家もあった。上半身黒焦げの死 体、側溝にころがる死体、それらを三日三晩、今の中央小の校庭で焼いた。「奉 安殿」を守るために死んだ父の後輩や校長先生も…。

そして、河村先生も「今のきな臭い時代」を告発する。

国家・国益と大声で怒鳴る人は信用できない。今日も教え子やその子どもたちが来てくれているのが嬉しい。戦後、黒い布を取り外した開放感は今も鮮やかに覚えている。私はおじをレイテで亡くした戦争遺族であり、空襲の二重の被害者。再び、戦争を許してはならない、ときっぱり結ばれた。

私の横の席に桜中だという女の子が遅れてきて座った。気が付くと私よりもたくさんメモをとっていた。私も2、3質問されたが、この子の胸にも父を失った悲しさと無念さはきっと残ったに違いない。語り継ぐ戦争とこの今の時代を見すえる思想を私たちは大いに力を尽くしてリレーしていかねばと思う。

「平和ボケ」なんかしている暇は無い。今日も沖縄の辺野古では強引に新基 地建設が進められ、オスプレイが我が物顔に飛び回っているこの国だから。